

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成30（2018）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 大阪大学（特任教授・後藤 祐児）
研究交流課題名 蛋白質凝集の先端研究ネットワーク形成

評価結果（総合的評価）	
<input type="radio"/>	A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
<input type="radio"/>	B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
<input type="radio"/>	C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
<input type="radio"/>	D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
<p>本課題は、日本側コーディネーターの蛋白質の凝集に関する長年の貢献に基づく知見、ハンガリー参加研究者と大阪大学が国際共同開発した解析手法BeStSel、大阪大学で開発されたアミロイド凝集誘導装置HANABIなど、少なくとも3つの要素が存在しており、これらが求心力となって蛋白質凝集の先端研究ネットワークが形成されようとしている。積極的な研究交流、セミナー、国際会議だけでなく、国内で開発された技術の普及という観点も存在するため、この研究事業を通して、さらにネットワーク形成が進むことは疑う余地がない。</p> <p>蛋白質の凝集に関する研究は、研究ツールの開発をとまないうつ、研究対象をモデルシステム（モデルタンパク質）から、生物学、医学的に注目される対象に広げ、切り込まなければならない。実際、本研究は、基礎研究から、医学的に重要であるアミロイドーシス、さらに近年注目されている細胞内の現象である液液相分離への関連についても展開されている。世界的水準の研究をねばりつよく推進し、成果を挙げつつあることは高く評価される。</p> <p>次世代の養成にも着実に取り組んでおり、今後さらに若手研究者自身が自発的・自律的に本事業を引っ張っていくような形で、ネットワーク形成と研究の発展がなされることを期待する。</p> <p>コロナウイルスの影響で国際交流は大変難しい時期にあるが、対応可能な手段を取り入れて、今後も継続して国際レベルの若手育成と世界的な研究拠点としての活動を期待したい。</p>	